中国におけるリトミック実践に関する一考察

神　原　雅　之　　正　木　一　輝
（児童学科教授）　（正木音楽学園校長）

1．はじめに

本稿は，中華人民共和国（以下，中国）におけるリトミック講座の概要を報告し，一考察を加える。筆者らは，2019年８月下旬，中国・江蘇省無錫市においてリトミック講座を担当する機会を得た。この講座の参加者は，上海市，無錫市，南京市，荷沢市（山東省）などから約20余名であった。参加者の多くはピアノ教育や幼稚園などで音楽教育に携わっておられる方々であった。講座の内容は，リトミックの基本的な項目を取り上げ，実践を行った。

日本においてリトミック教育が紹介された導入期を経て，より広く実践されるようになったのは1960年代である。その後，多くの研究者・実践者の努力によってリトミックは多くの人々に親しまれるようになった。一方，中国では，リトミック教育の紹介・導入はまだ始まったばかりである。そこで本稿ではまず初めに，リトミックの概要及び日本におけるリトミック導入について概観する。その上で，今回の中国におけるリトミック実践の経緯と今回の実践について述べる。今回の実践後に寄せられた参加者のコメントを分析した。コメントには音楽の多様な価値について述べられており，参加者の動機づけを強化していたことが読み取られた。最後に，中国におけるリトミック教育の課題について述べる。

2．リトミックについて

リトミックの概要について若干触れておこう。リトミックは，エミール・ジャック＝ダルクローズ（1865－1950，スイス）によって創案された音楽教授法である。ダルクローズは28歳の時にジュネーブ音楽院教授として赴任し，ソルフェージュと和声学の授業を担当した。当時の音楽学生は，ハーモニーの進行を譜面上で理解できたが，耳でその進行を感じ取ることができなかった，という（エミール・ジャック＝ダルクローズ2003：viii）。彼はその様子を前にして，学生の音楽的感覚を育成するためにはどのようにしたらよいのか試行錯誤した。その過程で，音楽の流れにからだの動きを重ね合わせることの有効性に気付いた。つまり，からだの動きは（学生が）音楽をどのように聴いているのか映し出していることに気付いたのである。ダルクローズは，からだの動きを基礎にした音楽を聴く耳を育てる教授法に工夫を重ね，体系化した。この教授法は，Rythmique（フランス語圏），Eurhythmics（英語圏）と名付けられた。日本ではリトミックと呼ばれる。

リトミックは３つの教科で構成されている。つまり，音楽的なリズム感を体験する「リズム運動」，その運動感覚を基礎にして旋律や和音を聴取するトレーニングである「ソルフェージュ」，そしてソルフェージュの体験を発展させて自由に音楽を創造する「即興演奏」の３つの柱で構成される。当初，音楽学生の音楽的感覚の育成を目指して構築されたアイデアは，幼児の感性を育む方法としても実践された。その効果は大人以上に顕著であった。昨今，リトミックの方法は，様々な領域に応用されるようになった。つまり，音楽学生の音楽性を育むだけでなく，幼児教育，障がい児教育，音楽療法，舞踏教育，演劇教育のトレーニングとして，そ

して最近では高齢者を対象とした試みも行われている。

20世紀初頭，リトミックは欧州を中心に注目され，瞬く間に世界に広く知られるようになった。日本には1909年に歌舞伎俳優の２代目市川左団次（1880－1940）がロンドンでリトミックを学び，帰国した。帰国後には自由劇場で小山内薫（1881－1928）らと共に演劇のトレーニングとしてリズム運動を導入した。小山内薫はドイツでリトミックを見学し大きな刺激を受けていた。更に，作曲家の山田耕筰（1886－1965）もドイツ留学中にダルクローズのアトリエを訪問し，リトミックを見学している。山田は，音楽と舞踏を融合した芸術表現のあり方に大きな刺激を受け，帰国後，舞踏家の石井漠（1886－1962）と共に舞踏詩という新しい表現を模索した（小林1996；片岡1999）。

1923年には音楽教師であった小林宗作（1893－1963）がフランスに留学し，リトミックを学んだ。帰国後，小林は幼児教育を中心にリトミックの普及に努めた。天野蝶（1891－1979），板野平（1928－2009）もリトミックの普及に尽力した（板野2016：95－139）。特に，板野平は文部省学習指導要領の改訂にもかかわり，小・中学校の音楽授業に大きな影響を及ぼした[注1]。こうして，今日の日本におけるリトミック教育の基盤が創られていった。

日本のリトミック普及の過程において，前述した有能な識者らの実践が布石となった。しかし，それだけでは今日的なリトミックの周知・拡大は望めなかったのではないかと推察される。日本での普及において大きなインパクトとなったのは，1960年代に板野平が中心となって国立音楽大学（東京都立川市）にリトミックの教育課程を敷いた学科を新設したことである。ここから多くのリトミック指導者が輩出された。加えて，板野平が主宰した「全日本リトミック音楽教育研究会」，そして岩崎光弘（1944－2019）が発起人となって創設された「特定非営利活動法人リトミック研究センター」（1988－），そしてリトミックの研究者・実践者によって構成された「日本ダルクローズ音楽教育学会」（1973－）や「日本ジャック＝ダルクローズ協会」（1999－）の活動も大きな推進力になった。こうして，日本におけるリトミックは多様な実践が行われるようになってきた。

３．今回の訪中に至るまでの経緯

さて，最近では中華人民共和国でもリトミック教育について関心が高まっているようである。当初，筆者に中国でのリトミック講座の依頼があったのは2017年であった。その発起人となったのは正木一輝（江蘇省無錫市）であった。今回の訪中は，正木と神原の出会いから始まったものであり，実際的な講座の企画・運営は正木によって推進された。この機会は，筆者らが中国におけるリトミック教育の実情に触れる貴重な機会となった。まずは，今回（2019年８月）の訪中に至るまでの取り組みについて概要を記しておこう。

初回の訪中は2017年８月であった。講座の期間は2017年８月23日～25日，会場は無錫市にあるLS（立特思庫）幼稚園であった。LS幼稚園の園長は，江南大学ビジネス学部準教授の施宏氏であった。女史は幼児教育の経営学について研究されている。リトミックにも強い関心を抱かれ，今回の会場を提供してくださった。この講座の参加者は約20名。参加者の多くは幼児教育および音楽教育に携わられている先生方であった。３日間の講座のプログラムは表１に示した通りである。

参加者の殆どの方は，リトミックは初めての体験であり，初めは動きも固かった。音楽と共に動くことへのためらいや恥ずかしさが感じ取られた。これは日本でも初心者を対象とした実践で同じような様子がみられる。従来の学習モデル，つまり読譜や聴音，ピアノ演奏や歌唱などの個人レッスンを中心とした音楽学習に馴染んでこられた方々には，からだの動きを行いながら音楽を聴くという体験に戸惑いを感じられたようである。しかし，音楽と動きの体験を重ねるにしたがって次第に心を解き，音楽的コミュニケーションの空間に馴染んでいかれた。音楽を聴き，動きながら笑顔がこぼれる様子は

表１　リトミック講座の日程とプログラム（2017年８月）

	９：30－10：40(70分)	10：50－12：10(70分)	13：30－14：40(70分)	14：50－16：10(70分)
８月23日	オリエンテーション，講義：リトミックについて	音楽と動き（基礎的な動き）	２拍子，３拍子，４拍子	２拍子，３拍子，４拍子，６／８拍子
８月24日	リズムカノン①	リズムフレーズ，指揮	複リズム①	複リズム②
８月25日	補足リズム	３対２	リズムカノン②	まとめ

表２　リトミック講座の日程とプログラム（2018年３月）

期日	９：00～10：20	10：40～12：00	13：00～14：20	14：40～16：00	
３月21日					19：00～上海師範大学音楽学部にて講演
３月22日	初級リトミックの概要	初級リズム（音楽と動き）	中級リズム（Ｔｅｍｐｏ，Ｄｙｎａｍｉｃｓ，space）	中級フレーズ	19：00～江南大学音楽科にて講演
３月23日	初級拍子（２拍子，３拍子）	初級拍子（４拍子）	中級リズムと空間	中級拍子とフレーズ	
３月24日	初級カノン，複リズム	初級複リズム，補足リズム	中級補足リズム	中級２対３，プラスティック・アニメ	
３月25日	初級フレーズ	初級カノン，初級まとめ	中級補足リズムとカノン	中級中級のまとめ	

印象的であった。

これに続く第２回目の訪中は，2018年３月21日～25日のリトミック講座であった（表２参照）。会場は初回と同じ。この講座では，大人を対象とした体験に加えて，リトミックの実際を観ていただく機会として園児を対象とした活動の時間をプログラムの一部に含めた。

この期間内では，上海師範大学および江南大学音楽学部からの要請を受けて，学生及び一般を対象に講演を行った。この講演では『なぜ音楽教育において動くのか』という演題を設け，約90分間，リトミックについて説いた。講演後には質疑応答も受けた。ここでも，リトミックに対する興味関心の高さを窺うことができた。

第３回目の訪中は，2018年８月であった（表３参照）。ここでは，前回に続き L.S 幼稚園の園児を対象とした実践を講座のプログラムに組み込んだ。加えて，８月31日には終日，無錫市立幼稚園（僑誼幼稚園）の園児を対象としたリトミックワークショップ，そして同幼稚園教員を対象とした研修会を担当した。同園は園児数1300人という大規模な幼稚園（教員の人数が約200名）であった。同園の園舎は円形３階建ての大きな建物であった。その園舎に囲まれた円形の空間に広場が設けられていた。幼児のための午睡室も設けられていた。図書室，造形室やその展示室など施設は充実していた。

４．今回の講座の概要

今回の講座の概要について述べてみよう。講座の日程は，2019年８月27～29日であった（表４参照）。８月27日と28日の２日間は神原と正木が担当，８月29日は李茉先生（華東師範大学講師（博士））が担当した。

表３　リトミック講座の日程とプログラム（2018年８月）

期日	９：30～10：50（80分）	11：00～12：30（80分）	13：30～14：30（60分）	14：45～15：45（60分）	16：00～17：30（90分）
８月28日（L.S 幼稚園）	挨拶，リトミックの基礎	拍（beat）の体験	ピアノ即興演奏（１）：ビートによる即興	授業実践（小学校１～２年生12名）：拍子	指導法（４～５－歳児の指導法）
８月29日（L.S 幼稚園）	拍子（２拍子，３拍子，４拍子）	フレーズ	ピアノ即興演奏（２）：音列による即興	授業実践（小学校２～３年生20名）：複リズム	指導法（小学生の指導法）
８月30日（L.S 幼稚園）	複リズム（binary リズム）	２対３のリズム	ピアノ即興演奏（３）：音階による即興	授業実践（幼稚園児）：即時反応	指導法（２～３歳児の指導法）
８月31日（僑誼幼稚園）	８：30－10：00 幼稚園講座①：ダイナミックスとテンポ	10：15－11：45 幼稚園講座②：リズムパターン	13：30－15：00 複リズム（ternary リズム）	15：10－16：40 プラスティックアニメ（形式，フレーズ	16：50－17：30 まとめ：動き，即興演奏

表４　体态律动培训（2019年８月）

期日	９：00～10：20（80分）	10：30～11：50（80分）	13：30～14：30（60分）	14：45～15：45（60分）	16：00～17：00（60分）
８月27日（神原・正木）	動きと音楽	拍と拍子	授業実践(1)：親子体験	ソルフェージュ(1)：半音と全音	即興演奏(1)，質疑応答
８月28日（神原・正木）	フレーズ，複リズム	２対３のリズム	授業実践(2)：親子体験	ソルフェージュ(2)：音列	即興演奏(2)，質疑応答
８月29日（李茉）	リズムパターン	音楽鑑賞（リトミック）	プラスティックアニメ	リズムゲーム	まとめ

参加者は中国国内で音楽教育や幼稚園に携わっておられる方々，そして一般の方など，22名であった。参加者の中にはリピーターの方もおられたが，その殆どはリトミック初体験であった。

５．参加者のコメント

今回の体験を通して，参加者はどのような気付きがあったのだろうか。参加者には３日間の講座終了後に自由記述によるコメントの提出を求めた。参加者22名の内17名からコメントが寄せられた。ここではテキストマイニングの手法を用いて，参加者のコメントの傾向を分析した(注2)。

図１は，17名のコメント（総文字数4239文字）に示された共起キーワードである。この図では単語の出現数が多いほど大きく，共起の程度が強いほど太い線で結ばれている。図１に示されているように，参加者の思いが多岐にわたっていることが読み取られる。表５は，出現数の多かった単語の上位を抽出したものである。ここに示されているように，名詞では「先生」「音楽」「勉強」「感謝」が多い。動詞では「できる」「学ぶ」「くれる」，そして形容詞では「楽しい」「よい」「素晴らしい」などが多いことがわかる。

図２と図３はコメント内に示された感情の傾向を示している。図２の「ポジネガ」はコメントについてポジティブな感情とネガティブな感情の存在比を示している。図３は，コメント中に含まれる各感情の度合いを数値に換算したものである（全ての感情の平均値を50％とした偏

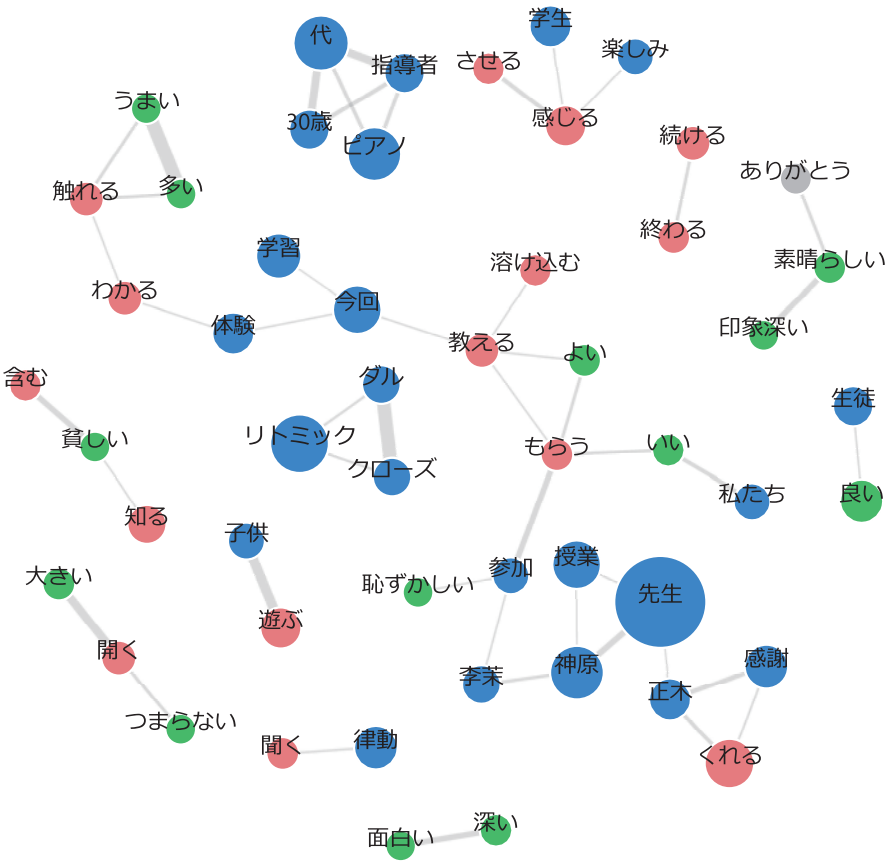

図 1　参加者のコメントみられた共起キーワード

表 5　出現数の多かった単語

名詞			動詞			形容詞		
	スコア	出現頻度		スコア	出現頻度		スコア	出現頻度
先生	30.55	69	できる	0.56	21	楽しい	0.15	8
音楽	22.77	39	学ぶ	13.65	18	良い	0.05	6
勉強	4.48	23	くれる	0.35	17	やすい	0.12	4
感謝	5.23	20	思う	0.03	7	素晴らしい	0.22	4
神原	119.07	19	遊ぶ	0.30	6	いい	0.00	2
リトミック	136.62	17	感じる	0.14	5	大きい	0.04	2

（注）スコアの値が多いほどコメント中で特徴的であったかを示している。

差値で示している）。これらの図に示されているように，参加者は今回の体験をポジティブに受け止めていたことがわかる。

図 4 は階層的クラスタリングである。文章中で出現傾向が似た単語を樹形図で示したものである。図 4 にみられる単語の出現傾向は，図 1 や表 5 と同じような傾向がみられる。以下，その具体的な記述と照らし，参加者の心情をみて

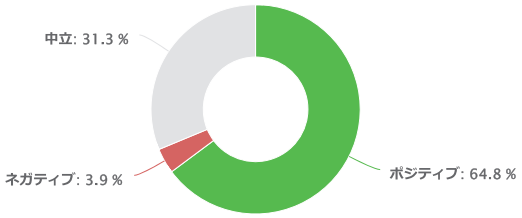

図２　ポジネガの傾向

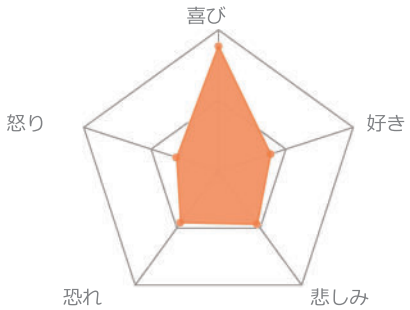

図３　感情の度合い

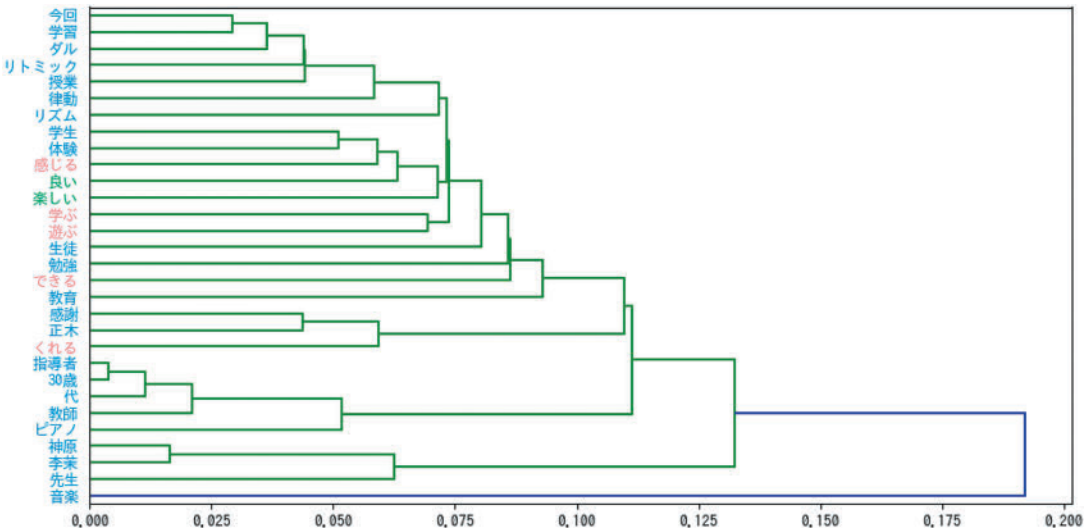

図４　コメントに示された階層的クラスタリング

みたい。

出現頻度の多かった「楽しい」「できる」「学ぶ」，そしてスコアの高い「リトミック」の記述に関連したコメントを抽出してみよう。

・リトミック講習会に参加し，大きな価値があると感じた。ダルクローズの教育理念は，運動，空間を結び付けた展開であり，いくつもの面で障害児のリハビリテーションのポイントが含まれていた。(30歳代音楽講師)
・リトミックは，音楽を生活に溶け込ませることができる。今回の勉強を通じて，（中略）安易に学生にピアノを教えるのではなくて，学生に音楽を感じ，音楽を探求し，音楽を生活に溶け込ませることだと認識した。(30歳代，ピアノ教師)

従来の教育に対するネガティブな思いを吐露したコメントもみられた。

・以前学んだ音楽はつまらないという印象。今回の体験は新しい世界の扉を開いたような印象です。これからは，私の生徒を楽しいゲームのような展開の中で音楽を学ばせ，授業を多彩で豊かにして，音楽の楽しみを感じさせたい。(20歳代，ピアノ指導者)
・音楽を学ぶのがこんなに楽しいのか！　学生時代のピアノの勉強の中で，私の先生からリズムの話を一度もされたことがなかった。大学を卒業してから何人かの専門家に付いて勉強を続けていたが，偶に彼らから律動の話をすることがあったが，うやむやに終わりました（後略）。(30歳代男性，小学校音楽科教

師）

・初めてリトミックに参加した私は，最初に恥ずかしさを覚えた。しかし最後には悠々とした姿勢まで，ひと回り成長することができました。（18歳，大学生）

リトミックの教育的な価値を見出した参加者の声も印象的である。

・子供を遊ぶことで学ばせ，学ぶことで遊ばせる！（中略）伝統的な教育モードは，機械的な練習を繰り返し，音楽の楽しみを失わせている。音楽を学び，音楽を理解するためには，ピアノを弾くだけに留まらず，体験することがもっとも良い道であり，共感的なセンスが大切だとわかった。（20歳代，ピアノ指導者）
・今回のリトミックの学習によって，音楽や律動に対する理解をより深め，聴力，注意力，観察力，理解力と行動力を鍛えるのを助けました。（60歳代，主婦）
・律動によって，退屈なリズム練習をより生きとしたものにし，生徒の内面的な感情表現を開発することができます。親子体験レッスンでは，実際のレッスンの中で起こりうることをより直感的に知ることができました。（20歳代，大学院音楽修士課程在学）

総じて，参加者は今回のリトミック体験に積極的にかかわり，好意的に受け止めていたことがわかった。中国におけるリトミック教育への関心の高さが感じられた。とりわけ，音楽学習初心者の指導の在り方について関心が高かったように思われた。加えて，今回は李茉先生（華東師範大学）によるリトミックの時間が含まれていたことは参加者にとって自身の音楽性を高める機会として貴重な体験となったように思われる。自らの成長を実感すること，これは幼児も大人も充実感を味わうためにも重要な要件となる。

6．今後の課題

４度の訪中を通して，中国におけるリトミック教育の一端を窺い知ることができた。特に，第３回目に訪問した無錫市立幼稚園の様子は印象的であった。中国の教育機関は概して生徒数・園児数が多く，１教育機関の規模が大きいのが印象的であった。大集団の指導ではどうしても一斉指導が中心となり，一人ひとりに目を向ける機会は少なくなる。多くの人口を抱える中国では，この集団と個人をどのように調和させていくのか大きな課題となるように思われた。

今回の参加者には，幼児・児童を対象とした音楽指導者，幼稚園教師が多く含まれていた。彼らの積極的な態度からは，新しい教育への憧れのようなものが感じ取られた。リトミックに対する興味・関心は，より実際的な，子どもの成長・発達に適した体験型の音楽教育を欲しておられるように思われた。また，ピアノや声楽の教育の過程に，また学校教育の課程に応用したいという機運も感じ取られた。

今後の展開について，いくつかの課題がある。一つは，リトミック指導者養成のためのフレームワークの構築が必要であるということである。リトミックを体験しようとするとき，その指導者の存在が欠かせない。現時点で，中国国内にも海外でリトミックを学んで帰国された方はおられるようである（その実態は不明である）。実際に，中央音楽学院（北京）や華東師範大学（上海）にはリトミックを専門とされた教員がおられ，リトミックの授業が単位化されている。しかし，圧倒的にリトミック指導者の人材が不足している。その指導者をどのようにして養成するか大きな課題となるだろう。この点について日本での事例は参考になるだろう。

日本では当初（20世紀初頭），欧米で学んだリトミック指導者は帰国後，自らのアトリエなどで実践を重ねていったが，その普及は限定的で，広く体験の場を生み出すことにはつながらなかった。リトミック教育の拡がりがみられるようになったのは1960年代に，日本の大学や研究会などでリトミックを学ぶ場が設けられたこと，もう一つは小学校音楽科の教育課程に影響を及ぼしたことが弾みとなった。

中国は，長い歴史と伝統的な表現様式を育ん

できている。伝統的な価値観も存在する。中国特有の表現を容認しつつ，新しい音楽表現を模索することが重要である。その意味でも，中国人による，中国人のための教育が模索されることが重要であるように思われる。

いずれにしても，現時点の中国は，リトミック黎明期といえるだろう。中国国内でリトミックの指導ができる人材の育成が欠かせない。抽象的な表現となるが，点から線へ，線から面へと拡がる地道な取り組みが必要である。そこでは，音楽的な豊かさを味わう体験が不可欠である。

註

1）板野平は，昭和33年に文部省から中学校音楽研究実験校の指定を受けて授業を担当し，学校教育においてリトミックの導入を図った。その成果は，『音楽反応の指導法』（国立音楽大学出版部，1959）として刊行された。これを受けて，昭和43年（1968年）に施行された「文部省小学校学習指導要領（音楽科）」では，学習内容の「鑑賞」「歌唱」「器楽」「創作」に加えて「基礎」が設けられた。

2）テキストマイニングについては，次の URL を参照した。「ユーザーローカルテキストマイニングツル」https://textmining.userlocal.jp/（2019年10月31日閲覧）

参考文献

エミール・ジャック＝ダルクローズ著，板野平監修，山本昌男訳（2003）『リズムと音楽と教育』，東京：全音楽譜出版社

板野晴子著（2016）『日本におけるリトミックの黎明期―日本のリズム教育へリトミックが及ぼした影響―』，神奈川：ななみ書房

片岡康子著（1999）石井漠―舞踏詩と展開―，舞踊學，1999巻 1 Supplement 号：49

小林恵子著（1996）「ダルクローズリトミックの日本への導入」，エリザベス・バンドゥレスパー著（石丸由理訳）『ダルクローズのリトミック』，東京：ドレミ楽譜出版社